「とはずがたり」二条の教養

―引歌をめぐって―

鈴木儀一

一

――観音堂の鐘の音、たゞ我が袖に響く心地して、「左右にも」とはかゝる事をやなど思ふに、猶出でやり給はで、「ひとり行かん道の御送りも」など誘ひ給ふも、「心もしらで」など思ふべき御事にてはなけれども、思ひ乱れて立ちたるに、隈なかりつる有明の影白む程になりゆけば、あな心苦しのやう、やがて引き乗せ給ひて、御車ひき出でぬれば、かくとだに言ひ置かで、昔物語めきて――（巻一）

この文章が、源氏物語の須磨の巻の「うしとのみひとへに物は思ほえで左右にもぬるゝ袖かな」、同じく夕顔の巻の「山の端の心も知らで行く月はうはの空にて影や絶えなむ」の歌を踏まえ、その場面が夕顔の巻に酷似している事は一目瞭然である。しかし作者二条は「昔物語めきて」と表現していて、源氏物語とは直指しない。それは狭衣物語・巻四の狭衣が宰相中将の妹君と契り、連れ出す場面とも重なるからであろう。

――御車ももたげたれば、いと軽らかに、かき抱きて載やたてまつり給へるを、弁などは、「いとにはかにこそ侍るべけれ。しばしは、かやうにても、おはしまさなんものを」「宰相殿も、いかにあやしう思さん」と聞えさすれど、「ならはぬあかつき起きも、苦しかるべければなり。まづ、たゞひとりばかりは、疾く乗り給へ」と、いそがし給へば、いと心あはたゞしき心地して――（岩波大系本四〇二頁）

なお、この文中の「ならはぬあかつき起きも、苦しかるべければなり」の語句も、源氏物語総角の次の語句を踏まえている。

――あな、苦しや。「あかつきの別れ」や。まだ知らぬことにて、げに惑ひぬべきをと嘆きがちなり――（岩波大系本・巻四・三九四頁）

源氏物語に描かれた王朝貴族の理想像は、中世に至り、貴族階級の政治的実権を失うとともに、回想的規範となり、源氏物語の世界に生きることが貴族の誇りであり、その心の支えとなった。従って過去の栄光に生きる宮廷貴族の社会は、平安朝の宮廷よりも王朝的世界、即ち源氏物語の世界であったといえる。その世界に生きた女性、宮廷女房であった「とはずがたり」二条の教養が、源氏物語と

その継承作品である狭衣物語とを軸とした王朝的なものであることは当然であり、「とはずがたり」に展開する余りにも源氏物語的宮廷生活がそれを肯かせる。

冒頭の引用箇所はその意味で象徴的である。それは、二条が十四歳で初めて後深草院の寵幸を受けた記事であり、その回想が、源氏物語の夕顔に拠り、狭衣物語に重なり、その狭衣物語が源氏物語を踏まえているからである。源氏物語は貴族生活の典拠であったことを示している。と同時に作者自身、それを疑うことなく準拠していることにもなる。それは幼時より宮中に養われた二条にとって弁別し難い誇らしき華やかな回想の世界でもあった。

しかし作者二条はもう一つの世界をも見る。それは西行の世界、宮廷貴族の世界から、源氏物語的規範の世界、美しく華やかであっても創造力の枯渇した亜流の世界から自由な世界へと歩いて行った。冨倉徳次郎先生の名づけられた女西行としての生涯の道であった。この道を辿らなければ、「とはずがたり」は生れなかったはずの中世的世界の道である。

——九つの年にや、西行が修業の記といふ絵を見しに、片かたに深き山を描きて、前には河の流れを描きて、花の散りかかるに、居て詠むるとて

風吹けば花の白浪岩越えて渡りわづらふ山川の水

と詠みたるを、書きたるを見しより、羨しく、難行苦行は叶はずとも、我も世を棄てて、足に委せて行きつゝ、花の本、露の情をも慕ひ、紅葉の秋の散る恨みをも述べて、かかる修業の記を書き誌して亡からん後の形見にもせばやと思ひしを——（巻一）

——修業の志も、西行が修業の式、羨しく覚えてこそ思ひ立ちしかば、その思ひを空しくなさじばかりに、か様の徒ら言を続け置き侍るこそ、後の形見とまではおぼえ侍らぬ——（巻五・結びの文）

前の源氏物語的世界と、この女西行の世界との交錯したものが、「とはずがたり」の世界である。この二つの世界に生きた二条の教養が、どのようなものであるか、文中に見られる引用・典拠とされた歌をめぐって考察したい。

二

管見に入った引用・典拠とされた歌と思われるものは、左記の表(1)の通りである。なお研究途上であり、その基準が主観的に相違する場合もあり、類歌のある場合に何れを採るか、慣用句的なものの場合にどう考えるかなどにより、計数に多少の出入があるのは避けられない。しかし全体の傾向は窺うに足ると思う。

なお、同一の歌が、勅撰集と他の物語・私家集に重なる場合は勅撰集に入れて数え、勅撰集の中で重なる場合は古い方に入れて数えた。例えば「あひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるゝ顔なる」の伊勢の歌は、古今集・後撰集にも重複しているが、古今集に数えた。

別表(1)の傾向を試みに、小島吉雄博士の「新古今和歌集の研究」によって、新古今集中の本歌取りの歌と比較すると、万葉集の歌を本歌とするものが二十三首、古今集からが百五十四首、後撰集から十一首、拾遺集から二十四首、後拾遺集から十二首、伊勢物語から

（別表１）

万葉集	2	(1)
古今集	22	(16)
後撰集	2	(2)
拾遺集	4	(3)
後拾遺集	4	
金葉集	3	
詞花集	3	
千載集	6	
新古今集	25	(1)
新勅撰集	2	
続後撰集	2	
続古今集	10	(1)
続拾遺集	2	
新後撰集	1	
玉葉集	2	
続千載集	3	
風雅集	2	
新千載集	2	
新拾遺集	1	
新続古今集	1	
伊勢物語	12	(5)
源氏物語	21	
狭衣物語	3	
山家集	7	
堀川百首	1	
平家物語	2	
総計	146	

（　）の数字は源氏物語の引歌数

十六首、源氏物語から十四首、狭衣物語から一首、続古今集から一首、その他で総数二百七十首であり、一番多い古今集の中の本歌の作者は読人知らずの歌が全体の半数以上を占めている。

別表(1)の中での古今集二十二首の作者中、読人知らずが十一名であり、「とはずがたり」の引歌・典拠歌の傾向も同一かに思われるが、その内容は違うようである。それは源氏物語による歌が著るしく増加しているように、古今集に拠っていることは拠っているが、同時にそれは源氏物語の引歌ともなっているのである。作者二条がそれを用いたことは、源氏物語への傾きをもって意識して用いたのではないかと思われる。

後撰集、拾遺集も同様な傾向をもつのであるが、歌数それ自体が数少ないので差し置き、古今集について調べて見ると、源氏物語と重複するのは次の如くである。

桐壺　うば玉の闇のうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり　（恋三・読人知らず）

夕顔　ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ　（羇旅・読人知らず）　「明石」「松風」再出

末摘花　ももちどり囀る春はものごとに改まれどもわれぞふりゆく　（春上・読人知らず）　「真木柱」「御法」再出

花宴　見る人もなき山里の桜花他の散りなむのちぞ咲かまし　（春上・伊勢）

須磨　あひにあひて物思ふ頃の我が袖に宿る月さへぬるゝ顔なるわくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつゝわぶと答へよ　（恋五・伊勢）　（雑下・在原行平）　「蓬生」再出

蓬生　世の憂き目見えぬ山路へいらんには思ふ人こそほだしなりけれ　（雑下・物部好名）　「初音」再出

み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ家にせむ　（雑下・読人知らず）

薄雲　深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨ぞめに咲け　（哀傷・かむつけ岑雄）　「柏木」「幻」再出

憧　恋せじと御手洗川にせしみそぎ神は受けずもなりにけるか

な　（恋一・読人知らず）「寄生」「東屋」「浮舟」再出

少女　飛鳥川渕にもあらぬ我宿もせに変りゆくものにぞありける
（雑下・伊勢）

初音　近江のや鏡の山をたてたればかねても見ゆる君が千とせは
（大歌所御歌・大伴黒主）

真木柱　須磨のあまの塩やく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり　（恋四・読人知らず）　「浮舟」再出

横笛　片糸をこなたかなによりかけてあすは何を玉の緒にせん
（恋一・読入知らず）　「総角」再出

夕霧　あかざりし袖の中にや入りにけむわが魂のなき心地する
（雑下・みちのく）　「浮舟」再出

椎本　わがいほは都のたつみしかぞすむ世を宇治山と人はいふなり　（雑上・喜撰法師）

やはり読人知らずの歌が多く七首を占め、ついで伊勢の三首が続いているのは女流歌人であるため印象が深いためであろうか。それにしても総数二十二首中十六首で、源氏物語の影響の大きさ、二条の関心の深さが推察される。源氏物語を通しての古今集摂取の感すらある。

この源氏物語に重複せず、狭衣物語と「とはずがたり」と重複する古今集からの引歌は次の三首である。

鳴き渡る雁の涙や落ちつらむもの思ふやどの萩の上の露
（秋下・読人知らず）

山がつの垣ほに生へる青葛人はくれども言づてもなし
（恋四・寵）

枕よりあとより恋のせめくればせん方なみぞ床中にをる
（雑体・読人知らず）

残りの古今集からの引歌は

たれこめて春の行方も知らぬまに待ちし桜もうつろひにけり　（春下・藤原因香）

音羽山けさ越えくれば郭公こずゑはるかに今ぞなくなる
（夏・紀友則）

秋の野に人まつ虫の声すなりわれかと行きていざとぶらはむ　（秋上・読人知らず）

この三首は何れも人口に膾炙し、愛誦され、慣用句的に用いられていたものであって、特に引歌とことわるに及ばない底のものでさえある。従って、この三首を除いた他の十六首が、悉く源氏物語・狭衣物語の引歌となっていることは、古今集に関する作者二条の教養が主としてこの二物語や伊勢物語によって養われたものと考えられないであろうか。

三

「とはずがたり」の引き歌で源氏物語・狭衣物語のそれと共通するもので管見に入ったものは次の九首である。

桐壺　人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな
（後撰集・雑一・中納言兼輔）（古今六帖・大和物語）

帚木　若狭なる後瀬の山の後にまたあはむ必ず今日ならずとも
（万葉集・坂上大嬢）

蓬生　世の憂き目見えぬ山路へいらんには思ふ人こそほだしなり

けれ　（古今集・雑下・物部好名）

み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ家にせむ

（古今集・雑下・読人知らず）

槿　恋せじと御手洗川にせしみそぎ神は受けずもなりにけるかな　（古今集・恋一・読人知らず）（伊勢物語）

常夏　筑波山端山しげ山繁けれど思ひ入るにはさはらざりけり

（新古今集・恋一・源重之）　「東屋」再出

若菜下　秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉残りて鳥や啼きなむ　（続古今集・恋三・読人知らず）（伊勢物語）

夕霧　飽かざりし袖の中にや入りにけむわが魂のなき心地する

（古今集・雑下・陸奥）　「浮舟」再出

幻　涙川落つる水上早ければせきぞかねつる袖のしがらみ

（拾遺集・恋四・紀貫之）

別表(1)の（　）内の数と比べて如何にも多く、源氏物語の影響の大きいことがわかる。それは別表(1)の中に数えられている狭衣物語の「まだ知らぬ暁露に起きわびて八重たつ霧に迷ひぬるかな」の歌は、むしろ源氏物語・総角の引き歌として「花鳥余情」にあげられている古歌「まだ知らぬ暁起きの別れには道さへ惑ふものにぞありける」を採るべきであることからさえ推察される。しかも漢詩文・経文の引用なども「とはずがたり」の方が、狭衣物語を飛び越えて源氏物語に直接に拠っている場合が多い。

しかし、各巻の巻頭に文飾を施す趣向などは狭衣物語の影響によるものであろう。「とはずがたり」巻二の巻頭の文章の美しさと、狭衣物語巻三の巻頭はよき対応をなしている。

とは云え、引き歌の例からも窺えるように、作者二条の摂取の仕方は源氏物語の延長に位置するものとしてであり、源氏物語と異った物語の世界としてではなかったようである。

四

引き歌の数が多いのは、古今集から二十二首、新古今集から二十六首、源氏物語から二十一首で、この三者が際立っている。既に述べたように古今集は源氏物語の世界に重なって摂取されていたのである。従って源氏物語からの引き歌の多いのは勿論当然である。しかし、新古今集は源氏物語の単なる延長ではない。王朝文化の精華として最後の輝きを放った勅撰集である。勿論、源氏物語の世界を思慕する情勢もその一端を荷なっている。と同時に、滅びの光を自覚しながらも情熱的に生きた西行的世界もその一端を荷なっている。「とはずがたり」の引き歌として採られた新古集の中の歌は二十六首、歌人二十二人。三首が引き歌になっているのは、俊成・西行で他は一首ずつである。俊成は宮廷歌人であり、西行は地下的自由歌人である。偶然の暗合であるかも知れないが面白い。西行の歌は山家集から取られたものと合わせると計九首となり、引き歌に採られた歌人としては最高である。女西行二条の西行に対する傾倒ぶりを示すものであろうか。

西行の歌は、巻一・一首、巻二・なし、巻三・一首、巻四・五首巻五・二首で、作者二条が旅に出てから殖えているが自然である。

次に例挙すると、（巻数は「とはずがたり」）

巻一　暮れはつる秋のかたみにしばし見む紅葉ちらすなこがらし

の風　（山家集・秋）

巻三　語らひしその夜の声は時鳥いかなるよにも忘れむものか
（山家集・夏）

巻四　色深きなみだの川のみなかみは人を忘れぬ心なりけり
（山家集・雑）

夜をこめて竹のあみ戸に立つ霧の晴ればやがてや明けむとすらむ　（山家集・秋）

清見湯月すむ夜半のうき雲は富士の高嶺の煙なりけり
（山家集・秋）

聞かずともこゝを世にせんほととぎす山田の原の杉のむら立ち　（新古今集・夏）

風になびく富士の煙の空に消えて行方も知らぬわが思ひかな　（新古今集・雑中）

巻五　吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ
（山家集・雑）（新古今集・雑中）

よしや君昔の玉の床とてもかゝらぬ後は何にかはせん
（山家集・雑）

この九首がそれぞれ歌集によって作者二条に印象づけたといふよりは、作者自らが語っているように、「西行が修業の記」とよばれた絵巻物によってであろうことが想像される。それが現存するものの何れかは判然としない。大原本「西行絵巻」に、「吉野山やがて」の歌のある絵が第三段に描かれているが、果してそれであるのか、否かを定める決定的手がかりではない。

しかし、この西行に関する知識、歌についての理解を深めたものが絵巻の類であったことを推論させる興味深い文章がある。

それは「とはずがたり」巻五の夢の中で、作者二条が亡父と語り合ったという話である。嘉元二年八月三日、亡父雅忠の三十三年忌の仏事を神楽岡に営んで帰った夜の出来事であって、

かやうに口説き申して帰りたりし夜、昔ながらの姿、われもいにしへの心地にて、相向ひて、この恨みを述ぶるに、「祖父久我の火相国は、落葉が峯の露の色づく言葉を述べ、われは『おのが越路も春の外かは』と言ひしより、代々の作者なり、外祖父兵部卿隆親は鶯の尾の臨幸に、『今日こそ花に色は添へつれ』と詠み給ひき。いづかたにつけても、捨てらるべき身ならず。具平親王よりこのかた、家久しくなるといへども、和歌の浦波絶えせず」など言ひて、立ちざまに、

なほもたゞ書きとめてみよ藻塩草人をも分かず情ある世にとうちながめて、立ち退きぬと思ひて、うち驚きしかば、空しき面影は袖の涙に残り、言の葉は、なほ夢の枕にとゞまる……。

この文章は、大原本「西行絵巻」の第五段と比較してみると、よく似ていて夢の趣向など、明らかに同巧である。

かくまどひありくほどに登蓮法師人をすゝめて百首のうたあつらへけれといさなひ申て熊野へまいるみち紀伊国千里のはまのあまのとまやにふしたりける夜の夢に三位入道俊恵など申していはくむかしにかはらぬ事は和歌のみちなり、これをよまぬ事をなげくとみておどろきてよみておくりけるにこのうたをかきそへてつかはしける

（以下25頁へ続く）

註19 「この一連の作を通じて、西行の若年のころの仏道に対するあくがれといったものを見ることができて、伝記上貴重な資料を提供している」（伊藤嘉夫「山家集」頭註）

「詞書と作品との全体に、何か夢見心地のような甘さというべきものが流れているのが、出家にはまだ距離のあった時期のことのようにも思わせるところがあるが、この安らかさは、むしろ決意のできている者の安らかさと見るべきであろう。義清にとって出家は苦渋をともなうものではなく、明るい安らかな境のものであったことを思うのである。」（窪田章一郎「西行の研究」一二五ページ）

註20 窪田章一郎「西行の研究」一二五ページ（註19参照）。

註21 詞書「世にあらじと思ひたちけるころ、東山にて人々寄霞述懐と云ふことをよめる」

註22 詞書「同じ心を」

註23 詞書「いにしへころ、東山に、あみだ房とまをしける上人の庵室にまかりて見けるに、なにとなくあはれにおぼえてよめる」

註24 窪田章一郎「西行の研究」一二六ページ。

註25 風巻景次郎「日本古典文学大系・山家集」頭註。

註26 「数ならぬといふは数へ立てられぬの意だが、西行が此の言葉を用ゐる場合は、殆ど皆、おのれの身分の卑しきことを意味している」（川田順「西行の伝と歌」二二ページ）

註27 「この百首歌は余程若い時分、即ち出家前の作と見え、幼稚である」（尾山篤二郎「創元文庫・西行法師全歌集」脚註）

註28 「この百首は、年少の時代の作のやうで、西行晩年に自選した両宮歌合には一首も採っていないし……云々」（伊藤嘉夫「山家集」頭註）

註29 「『一』と『千』との対照なども意識されていて、『千鳥』は多くの鳥という意味であろう。……『一声におどろかされて』という句には、世の中のことを譬喩的に暗示しているのかもしれない」（窪田章一郎「西行の研究」六〇二ページ）

なお、文中の歌番号は、伊藤嘉夫氏の「日本古典全書・山家集」によった。

（昭和41年度国文学科卒）

（15頁より続く）

すゑの代もこのなげきのみかはずとみしゆめなくはよそにきかまし

「とはずがたり」巻五の話は、作者二条によって意図して作られた虚構とは思われない。事実談なのであろう。それは意識しない記憶がもたらした実際経験なのであろう。「西行が修業の記」が現存の大原本「西行絵巻」の系統のものとも断定出来ないが、余り遠くない内容をもったものなのかも知れない。

古今集からの引き歌が源氏物語の引き歌が包んでいたように、作者二条に深く源氏物語の世界は広がっている一面、西行の世界も作者二条の心を占めていたのである。その意味で中世の人であったといえよう。

（本学講師）